

# 伝書鳩

第21号

井上靖記念文化財団

## 梅咲く頃

井上 靖

世の中には幸と不幸とどちらが多いでしょうか、とその人は訊いた。大体平衡を保っていると思いますよ、同じ数ではないですかと、私は答えた。いや、とその人はかむりを振って、どちらかが少しだけ多いんです、その証拠に今年もまた梅の花が咲いたではありませんか、と言った。確かに庭の梅の木は二、三

日前から白い花を着け始めている。世の中にちらばっている幸、不幸の平衡が破れたとすれば――、と私は思った。それはその訪問者の持つ不幸が原因しているに違いなかったが、それには触れなかった。相手もまた黙っていた。その人の方は、それは紛れもなく私の匿し持っている不幸のなせる業だと信じ、その摘発のための訪問であったかも知れない。



梅咲く頃(詩) 井上靖……………2

ご挨拶 井上修……………6

芥川賞受賞作『鬪牛』誕生秘話 岡崎正隆……………8

東北・北上で読む井上靖 小野寺苓……………14

鳩のおしらせ……………19

井上靖研究会の二人の会長 荻久保泰幸氏と傳馬義澄氏を追悼

瀬戸口宣司……………20

第四回 井上靖記念文化賞 宮本輝氏・岡野弘彦氏に……………26

井上靖未発表資料\*5

村はずれ(監修・解説 高木伸幸)……………34

「世田谷の家」と子どもたち 井上恭一……………50

令和元年度 事業報告 井上修……………54

鳩のカット 福井欧夏  
花のカット 黒田佳子  
奥付のカット 岩永泉

令和元年度の財団運営は旭川のご協力もあり、スムーズに進むと思っておりましたが、令和二年一月になって日本中、いや世界中にコロナ・ウィルスが蔓延し、社会が動かなくなりました。本財団も少なからずその影響を受け、皆様にご迷惑をおかけすることになりました。

理事会は三密を避けるため三月の予算理事会、六月の決算理事会のいずれも書面で行ないました。理事の方々に直接お目にかかりお話を伺えない一年はとても不安でございました。六月の評議員会は四年に一度の人事の年に当たることあつて、ウェブ会議にいたしました。初めての試みで、不慣れな事務方の不手際に皆様ご対応くださりましてありがとうございます。

第四回井上靖記念文化賞は、二月の選考委員会で文化賞に小説家の宮本輝氏、特別賞に歌

人の岡野弘彦氏が選出されました。贈呈式は年度をまたいで五月に春の旭川で予定しておりましたが、これもコロナ禍で中止せざるを得なくなりました。受賞者の方々にはコロナが一段落した十月初めに、私が直接お宅に伺ってお渡しして参りました。お二方とも、大変喜んでくださいました。伊丹にお住まいの宮本氏のところにはお忙しい中を、本財団理事の狩野伸洋氏と集英社の宮本輝担当でいらした村田登志江氏にご同行をいただきました。

残念ながら訃報もあります。井上靖研究会の初代会長の萩久保泰幸先生が昨年二月に、二代目会長の傳馬義澄先生が今年四月にお亡くなりになりました。長年にわたる研究会での熱心なご指導、誠にありがとうございました。詳しくは本誌の瀬戸口宣司さんによる追悼文をご覧ください。

冬を迎えてコロナがまた猛威を振るいはじめているようです。ことに旭川が影響を受けそうで心配です。来年は何とか正常の生活に戻れますことを願って止みません。

令和二年十一月吉日

# 芥川賞受賞作『鬪牛』誕生秘話

岡崎正隆（元文藝春秋編集者）

「戦後の文学がスタートしたとき、戦前の私小説を克服して、開かれた小説」をつくりなすことは、時代の要請そのものであった。井上靖の登場は、その要請にこたえるものとして受け入れられたのである」

文芸評論家磯田光一の文章ですが、井上靖は戦後文学が待望していた申し子でした。

井上靖は昭和二十五年一月、『鬪牛』で第二十二回芥川賞を受賞しましたが、候補にあがった作品は十一篇（『猟銃』も含まれます）で、阿川弘之、島尾敏雄、澤野久雄などの作家がノミネートされていました。下馬評通り、井上靖が選ばれましたが、『猟銃』より『鬪牛』

に賛成する選考委員が大半を占めました。

選考委員の岸田國士は次のように選評しております。

「『鬪牛』は、わが国では珍しい、既に成熟を感じさせる、一個の文学的才能の所産である。常識に富んだ、余情ある巧みな作品がどしどし書ける作家の手腕を示している。現代小説の新しい一つの領域は、こういう感覚によって拓かれるともいえるであろう。衆目の見るところ、入賞作として、これも、当を得たものである」

選考委員は岸田國士のほか、瀧井孝作、佐藤春夫、石川達三、舟橋聖一、丹羽文雄、宇野浩二、坂口安吾、

川端康成など、当代を代表する錚々たる作家たちです。『鬪牛』は、新聞社が野球場で鬪牛大会を開催するという前代未聞の興行企画で、新聞記者の興行に賭ける情念と男女の恋愛関係を巧みに織り交ぜながら、全編に主人公のニヒリズムと孤独感が色濃く漂っている作品です。

この作品は『サンデー毎日』の懸賞小説に応募した『流転』で千葉亀雄賞を受賞して以来、十一年ぶりに書かれた作品です。

『鬪牛』は鎌倉文庫発行の文芸誌『人間』の「第一回新人小説募集」に井上承也の筆名で応募、選外佳作に選ばれましたが、当選作なしでした。翌年、「第二回新人小説募集」で『猟銃』を応募しましたが、これも落選の憂き目に遭っております。

井上は「芥川賞受賞の頃」（芥川・直木賞の三十年）昭和三十九年三月）で、この二作品のその後のいきさつを書いております。

「東京へ出たので何とかしてこの作品を発表したい

と思っていたが、作家にも雑誌社にも全くつてというものがなかった。当時和田芳恵氏が『日本小説』という中間小説誌を編集しておられ、だれかの紹介で、その編集部へこの二篇の作品を持ち込んだ。そしてどうにか掲載の話がまとまり、ゲラ刷りになった時、運悪く雑誌の方が潰れてしまった」

和田芳恵は新潮社出身で、在職中は『日本文学大辞典』を手がけ、退社後、昭和二十二年、大地書房発行の『日本小説』の編集に携わって、中間小説興隆の先駆者となった人でした。樋口一葉研究の第一人者として知られ、昭和五十九年には『塵の中』で直木賞を受賞しております。

その後、毎日新聞社の同僚の紹介で、佐藤春夫に『猟銃』を読んでもらうチャンスを得て、評価されます。佐藤春夫は当時、門弟が三千人いるといわれた文壇の大御所でした。太宰治は芥川賞欲しさに弟子入りしました。五年前、太宰から佐藤に宛てた手紙が発見されましたが、毛筆で巻き紙に書いた手紙は実に四メー

トルに及ぶものでした。

「第二回の芥川賞は、私に下さいますやう、伏して懇願申しあげます。私は、きつと、佳い作家に成れます。御恩は忘却いたしません。(中略)」

私を助けて下さい。佐藤さん、私を忘れないで下さい。私を見殺しにしないで下さい。いまは、いのちをおまかせ申しあげます」

太宰は残念ながら第二回の芥川賞の候補に選ばれませんでした。当時、芥川賞に一度候補になった者は候補にしないという暗黙の取り決めがあることを太宰は知りませんでした。

余談ですが、私は大学在学中、佐藤春夫の「特別講義」を受講しましたが、その年、佐藤春夫は自宅でラジオの録音中、「幸いにして……」と発した時、心筋梗塞で亡くなりました。

井上は佐藤春夫の死を悼んで『佐藤春夫先生の耳』と題した弔詩を遺しております。

と愛人の娘からの手紙で物語は構成されております。

小説『猟銃』が描かれた翌年、『詩文化』に「猟銃」と題した詩が掲載されておりますが、小説『猟銃』に掲載された詩を引用させていただきます。

「その人は大きなマドロスパイプを銜え、セッターを先に立て、長靴で霜柱を踏みしだき乍ら、初冬の天城の間道の叢をゆつくり分け登って行った。二十五発の銃弾の腰帯、黒褐色の草の上衣、その上に置かれたチャアチル二連銃、生きものの命断つ白く光れる鋼鉄の器具で、かくも冷たく武装しなければならぬものは何であろうか。行きずりのその長身の獵人の背後姿に、私はなぜか強く心惹かれた」

小説『闘牛』には詩は載っておりませんが、芥川賞受賞の年の九月、『サン写真新聞』に八丈島の闘牛の写真と共に、原稿用紙に手書きの原稿の写真版を掲載、題名は「闘牛」です。

佐藤春夫は昵懇の大佛次郎に『猟銃』を読んでもくれるように依頼しました。大佛次郎は『鞍馬天狗』で人氣を博した作家ですが、昭和二十一年から雑誌『苦楽』の編集に携わっていました。

『苦楽』はもともと、大正十三年、大阪の化粧品会社プラトン社が発行していた文芸誌です。編集者として直木三十五、川口松太郎がおりました。「高踏にも過ぎず、と云って卑俗にも墜ちず」をモットーに編集、岡本綺堂、長谷川伸、村松梢風、谷崎潤一郎、泉鏡花、徳田秋声などが執筆、昭和三年に廃刊になりましたが、戦後、大佛が同名の雑誌を再刊行することになります。『猟銃』を読んだ大佛は『苦楽』ではなく、文藝春秋の『文學界』編集長の上林吾郎(後年、社長)に、作家の今日出海を通して依頼します。

こうして『猟銃』は『人間』に応募してから約二年、陽の目をみることになりました。

『猟銃』の主人公は日本獵人倶楽部の機関誌『獵友』に散文詩「猟銃」を載せますが、その詩を読んだ獵友から、三通の手紙が送られてきます。獵友の妻と愛人

「ここは、あの豪華なスペインの闘牛場ではない。

騎馬槍手も居なければ

屠牛士も、着飾った見物人も居ない。

初秋の大きい雲の湧く空の下で

三百貫の牛と牛とが

闘志を火のように噴いて

力と力とを競っている。

ああ、この素朴な格闘！

これは東洋の、日本の、

荒海に取り巻かれた八丈島の、

そこに昔から行われている闘牛。

血腥ささのみじんもない。

併し、勇猛な競技。」

紆余曲折があつて、『文學界』に『猟銃』が掲載されたのは昭和二十四年十月号、その二カ月後には『闘牛』が載り、同月の『別冊文藝春秋』に『通夜の客』が掲載されました。

決して順風満帆でなかったわけですが、もし、『闘牛』が『人間』か『日本小説』に掲載されておりましたら、『闘牛』で芥川賞を受賞することはありませんでした。

文藝春秋社は昭和二十一年、創立者の菊池寛が解散を声明したため、芥川賞直木賞は四年半にわたり中断しており、選考会が再開したのは昭和二十四年八月からです。

その点、『猟銃』と『闘牛』が『文學界』に掲載されたタイミングは幸運というほか、ありません。

第一回の芥川賞受賞者の石川達三の『蒼氓』も同じケースでした。

『芥川・直木賞の三十年』で、川口松太郎と石川達三は「わが文学開眼」という題で対談をしております。

川口は第一回の直木賞受賞者です。

「石川 僕の『蒼氓』もほんとうは受賞の一、二年前に書いたものだからね。『蒼氓』は改造の懸賞へ出して落ちたんだ。選外佳作。

賞しております。その当時、芥川賞の選考会は直木賞の三日後に行われており、選考委員の永井龍男が『或る「小倉日記」伝』は芥川賞にふさわしい作品だということ、芥川賞の選考会に回したいきさつがあります。芥川賞を受賞したのは松本清張ほか、五味康祐で、兩人の受賞後の活躍はどちらかというところ、直木賞の作風ということがいえると思います。

このときの芥川賞候補者の中には、後年、芥川賞を受賞することになる小島信夫、近藤啓太郎、安岡章太郎、吉行淳之介もいました。これを契機に、芥川賞直木賞の選考会は同月同日に行われることになりました。

井上靖は単行本の『闘牛』の「あとがき」で次のように書いております。

「なほ本書の校正中、『闘牛』による芥川賞受賞の報に接し、その僥倖に驚くと共に、果して今後大方の期待に添え得るか否かを懼れるものであるが、常に

川口 それでどこへ発表したの。

石川 その翌年、大阪に『旗』というシャレた同人雑誌があった。金をかけた雑誌でね、それが載せるから送ってよこせというんだ。十二月号に載せるはずだったのが潰れてね。これが載っていたら、去年の作品ということになるから芥川賞銜の対象にならなかったんだよ。そうすると翌年四月になって、仲間のやつが同人雑誌を出すから、お前の選外佳作を出せというんだ。ケチがついたからいやだった。いたら、『見せる』といって持って行って、パッと載せたんだ。だから不思議なもんだね。仲間の連中が『お前は幸運なやつだ』というけれども、そうかもしれないと思う」

このように賞には運不運がつきものですが、松本清張も「賞と運」と題して、「受賞は全く運だといいたいのだ」と書いております。

松本清張は『或る「小倉日記」伝』が直木賞の候補にあがっておりましたが、本人も知らずに芥川賞を受

文学の高い峯の稜線に目をおき、真直ぐに歩いて行く態度だけは決して失ふまいと自分にいひきかせてゐる。

自らの力も顧みず、貧しい作品の教を乞ふた佐藤春夫先生、大佛次郎先生、作品ごとに鞭撻と激励を得た今日出海氏。また怠惰な私を、暖い友情をもって創作生活に駆りたてて下さった上林吾郎氏に、これを機に限りない感謝の意を表させていたたく

人と人との縁や絆によって、作家のその後の文学人生が大きく変わることがありますが、石川達三は井上靖の将来について選評で次のように書いております。

「なかなか巧みな技巧のある人で、小説を面白く構成して行く技術をもっている。将来相当の多作濫作にも耐え得る作家だろうと思う」

# 東北・北上で読む井上靖

小野寺苓（北上市・井上靖文学を読む会代表）

令和二年四月十七日、岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館の一室を借りて行われている「井上靖文学を読む会」は、百回開催を記念して会員による手作りの文集を発刊した。

題して『読む・百回のステージ』。

『オール読物』の編集長をされた鈴木文彦氏から「全国でもこれほど一作家について語り合っている集まりは珍しいのでは」と、便りを戴いた。他からも、一人の作家について百回を超える会合によって作品に対応した例はあっただろうかという感想を戴いたりした。岩手県という郷土性、北上市という環境に着目するという有難い手紙もあった。

急がず、焦らず、二ヶ月に一度という他からみれば

実に間の抜けたようなゆったりとした「読む会」の会合は、いつの間にか十六年の歳月を重ね、百回を超えた。殆どの会員はこの十六年間、休まずに出席し、百篇の井上作品を読んだことになる。

有難いことに最近では、この百回記念誌を読んで参加を申し込む方も現れた。一人でも多く井上靖文学に親しむ人が増えればいいと思っている。

「井上靖文学を読む会」の発足は、日本のあちらこちらにある文学館の中で、ただ一つ詩歌を中心にした文学館、「日本現代詩歌文学館」の誕生に由来する。北上市に設立するために奔走し、それが実現した後に初代事務局長として文学館の仕事に携わった、今は亡き佐藤章氏の発想である。この文学館がどうして東北の岩

手県の小さな都市、北上市に設立されたのか……。その経緯は佐藤章氏の著書に詳しくあるので省略するが、

明言出来ることは、当時の北上市の市長をはじめ助役、市職員、北上市在住の詩人、北上市出身の出版関係者、北上市に根を下ろしたマスコミ関係者らの東北人特有の情熱と粘りであった。そして大きな勇気を与えられたのは、小学館社長の相賀徹夫氏や集英社の力強い協力であった。日本にただ一つの詩歌の文学館は、辺鄙な東北というイメージが強い岩手県北上市に設立されたが、実は北上市は東京から新幹線で乗り換えなしで二時間半で直行出来る便利な場所なのである。

初代名誉館長は井上靖先生である。

日本現代詩歌文学館開館にあたっての東京総会の席で挨拶された先生は、「私は小説家であると共に詩人でもあります」と述べていられる。

北上市に設立することについては「すばらしい」と言われた。先生が北上市を訪れた時の印象もやはり「すばらしい」の一言であった。「詩歌文学館が出来るのはこの町が一番いいんじゃないか」とも述べられた

という。

ふみ夫人も平成二年五月、日本現代詩歌文学館の落成式に出席される先生に同行された。新幹線が北上平野を通り抜けている時、車窓から北上川を見入っていた先生は、「ね、いい川じゃないか」と言われたと、日本現代詩歌文学館振興会発行の『井上靖晩年の詩業』に書かれている。更に、新築した館内を一通り見て廻られて、「日本一だなあ」と、独り言を言われたという。

「井上靖文学を読む会」の企画が提案され、それは<sup>たちま</sup>忽ち声をかけられた数人の賛同を得た。すぐに準備に入り、発足するまでそんなに日数はかからなかったと思う。東北人は反応が遅い、のろまなどと有難くない言葉を戴くことが多いが、この時は本当に素早かった。発会記念行事には時の北上市長、高橋盛吉氏に講話をお願いしたが、何と、氏も井上先生の大ファンで、講話は井上先生の作品に関する味わい深いものであった。発会以来一度も休むことなく「読む会」は続き、いつとはなしに百回を迎えた時点で記念誌を作ろうという

話になった。文字として記し残しておく大事さを何度も繰り返して言っていたのは、館の初代事務局長の佐藤章氏である。その意を継いだ形で「読む会」の副会長である北上市在住の詩人、文学館設立にも貢献した斎藤彰吾氏が中心となって作業が進められた。

会員は必ずしも井上作品に無条件で惚れっぱなしのファンだけとは限らない。会員の一人は、「読む会に参加してみて、井上靖の作品を褒めあうだけの論になりやすく深い論議が行われないうらさがあつた。私は作品のテーマ、背景をはっきりさせることにより、作品に対する批判的な意見をあえて言うことにより、論議を盛り上げる努力をしてきた」と、述べている。彼の存在でより一層様々な意見が出るようになった。

また、思わぬ勉強をさせられることもあつた。

別の会員は「二人の『女房』——侍と待」と題して論考を深め、私たちをたじろがせるような詳しい見解を記念誌の中に示してくれた。彼が記述しているのは短篇「本田忠勝の女」に出てくる「侍女房」と「侍女房」についてである。角川文庫には「侍女房」、新潮社

を思う。

話した言葉は録音でもしない限り消えてしまう。思ひ出したとしても正確ではないだろう。しかし、書いたものは残る。推敲も重ねられ、書き手の知恵も纏められる。佐藤氏が「書いて残せ」と、何度も言われたことが実現し、思わぬ充実した記念誌になった。

予算もないので、経費節約のためにすべて手作りで作業することになった。編集委員の見事な編集は、先に述べた『オール読物』の鈴木文彦氏に「編集の妙に打たれました」とお褒めの言葉を戴いたほどである。作業の手伝いをするために自発的に会員が集まってきた。文字を打ち込み、印刷するのも会員、用紙を選別し、買うのも会員、製本の力仕事も会員。「読む会」の会員はある時は労働者になって狭い部屋で仕事をした。幾度も車を走らせてあれこれ手配し、打ち合わせた。ある会員は「世の中に出す本を作ることって、こんな大変なものかとよく分かりました」と述懐していた。よく考えてみると、これも井上先生の力である。作品を読むことから発展した絆。「有難うございました」

の『井上靖全集』には「侍女房」とある。私たちは全集を資料としていたが、作品を語り合った時に、角川文庫を読んだ一人の会員が、本の記述には「侍女房」とあり、「侍」は「侍」の誤植ではないかと発言した。それに反論したのは、農業を営む男性。彼の発言によると、今でも嫁を迎える婿の家では「侍女房」という名の役割を持つ女性が待機しているというのである。地方に生きていた古くからの習慣。今も使われている言葉。小説の中の一つの単語に着目し食い込んでいた会員の、目の覚めるような論が記念誌に展開されている。私は曾根博義先生が生きていらしたら、色々にご教授を戴いたのでないかと思つたほどである。個人的に多々ご指導いただいた私は、度々曾根先生を思い出し、いつか「読む会」にお招きして会員揃つてお話を伺いたいと思つていたので、もしご存命であれば、「侍」と「待」の話題もいい材料ではなかったかと残念である。

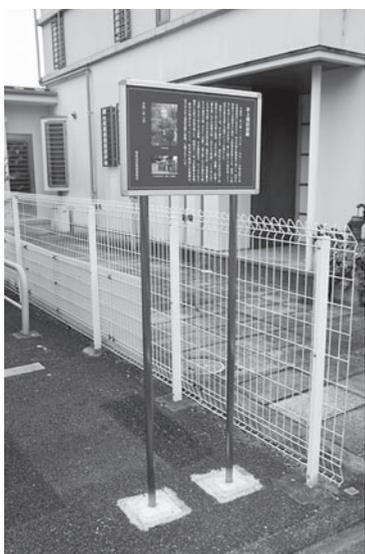
本を作つて本当に良かったと思つた。佐藤章氏が言つていたように、文字にして残しておくことの大切さ

とお礼を言いたい。

私は幸運にも井上先生の隣の席に坐らせていただいたことがある。北上市で行事があつた時である。井上先生の作品に惚れ込んでいた私を知つていた知り合いの新聞記者が、私にとっては夢のような配慮をしてくれたのだ。その時、舞台では北上市の勇壮な郷土芸能「岩崎鬼剣舞」が舞われていた。

先生は私に、「私はこの鬼剣舞が大好きです」と、はっきり言われた。そして話しながらも目はしっかりと舞台の方に向けていらした。後に調べてみると、先生は昭和三十二年、『随筆サンケイ』の特集「次の世に残したいこと」に、「岩手の鬼剣舞」と題してエッセイを書かれている。「私がこれまでに見た郷土舞踊の中ではもっとも優れたものであつた」と称え、この美しさは民族舞踊の持つ生命力が失われていないことと断じ、是非、このままの形で残しておきたいものと願いを述べていらつしやる。

あの時のことを私は思い出すのだが、場内一杯に響



井上靖邸跡地に案内板が設置

井上靖の邸宅跡地に、世田谷区によって、令和二年三月に案内板が設置されました。昭和三十二年に建てられた邸宅は、井上の終の棲家となり、妻ふみの死後、平成二十三年に解体され、書齋と応接間は旭川の井上靖記念館内に移築されました。現在は井上靖にゆかりのある建造物は残っていません。案内板には作家の略歴と写真、邸宅の門構えの写真が掲載されています。



井上靖氏とその隣に座る筆者（第1回詩歌文学館賞贈賞式後のパーティ、昭和61年5月）

き渡る太鼓や笛の音、抜刀して刃を光らせながら踊りまくる勇壮な姿。その雄々しい踊りに目を向けながら、岩手に住む私に「よく見ておきなさい」と言わんばかりの様子であった。新しい工夫をこらしたり、新しい衣装を考案したりすることを戒めてもいられる。先生と北上市を結ぶ糸は日本現代詩歌文学館だけではなく、古い美しい歴史を今も息づかしている鬼剣舞にもあったと、嬉しい思いである。

先生は何度も中国にいらしているが、私に話して下さったのは、広い中国の自然の風景だった。

「赤い土の上には赤い花、黄色の土の上には黄色の花が見渡す限り咲いていました」

私は訪れたことのない中国の広大な土地の夢のような美しい風景を、先生の話を聞きながら思い浮かべた。

「見えるのは死だけです」と、寂しく強烈な言葉を残された先生だが、しかし、<sup>まぶた</sup>瞼の奥では黄色や赤い花の広がる大きな美しい世界も見られていたに違いない。

井上靖記念館（旭川市）

○企画展「井上靖 人と文学 XI——「幼き日のこと」を巡って」（令和三年一月三十一日）

昭和四十七年九月から四十八年一月まで百十二回にわたり『毎日新聞』に連載された「幼き日のこと」を取り上げ、自筆原稿、構想メモ、創作ノートとともに井上書き残しておきたかった幼少時代を展示します。

井上靖記念館 ☎〇一六六―五一一―一八八

井上靖文学館（長泉町）

○企画展「井上靖とオリンピック 1960-1964」（令和三年三月二十三日）

新聞社の特派員として現地取材した一九六〇年のローマオリンピック、観戦記を発表した一九六四年の東京オリンピックに焦点を当て、作家がオリンピックをどう見たのか、当時の足跡をたどります。

井上靖文学館 ☎〇五五―九八六―一七七―一

# 井上靖研究会の二人の会長

荻久保泰幸氏と傳馬義澄氏を追悼

瀬戸口宣司（詩人・井上靖研究会常任理事）

「井上靖研究会」の設立当初から会の発展に会長として尽力された初代・荻久保泰幸先生と二代目・傳馬義澄先生が、あいついでお亡くなりになった。お二人を追悼する意味もこめて、研究会設立の経緯について書いておきたい。

「井上靖研究会」の設立については、「福田正夫詩の会」の金子秀夫さんと福田美鈴さんご夫妻が、お世話になった井上靖先生の文学を研究する「井上靖研究会」を設立したい、という話からはじまった。

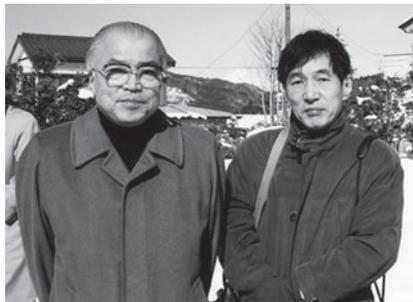
もちろん井上家のご家族も同じようなご意向があり、井上先生のお墓参りだったか、有志で白壁荘に宿泊したときご家族をまじえて話をする機会があり、どのよ

うに進めるか私に考えるようにとのご指示があった。私はまず荻久保泰幸先生、傳馬義澄先生、曾根博義先生（日本大学教授）、藤澤全先生（日本大学教授）に研究会設立について話をし、同意を得た。

大学の会議のため欠席された藤澤先生を除く三人の先生方と金子さん、福田さん、それに私と新宿の喫茶店で会合をもったのは、平成十一年六月二十三日であった。私はこの打ち合わせの資料のために、全国の主だった学会の会則を調べてまとめたものを皆さんに配った。多少変わったところはあるが、これが現在の会則になっている。とりあえず会の姿として執行部を作らなければならず、会長を荻久保先生にお願いした。創立記念大会を十二月五日に開催することも決まった。

この決定にしたがい、後日、創立記念大会を、國學院大學本館会議室を会場に行う旨を関係者に広報した。このお知らせには発起人として荻久保泰幸、曾根博義、藤澤全、笹本正樹、森井道男、工藤茂、傳馬義澄、金子秀夫、福田美鈴、瀬戸口宣司の名がある。

記念大会で荻久保泰幸先生は「井上靖文学は、現代日本文学を代表する、壮大華麗な業績、不朽の盛事である。私もその井上文学の総体を二十世紀に向けて、



荻久保泰幸先生（左）と傳馬義澄先生（右）  
（湯ヶ島小学校校庭にて）

飛躍的に継承、発展させることを念願した。井上靖は『わが一期一会』のなかで中国唐代の文人・顔真卿の書に対しての褒め言葉、点は墜石の如く、画は夏雲の如く、鉤は屈金の

如く、戎は発弩の如し』という言葉が好きで、これは自分の人生にとっても、生活にとっても文学にとっても、千均の重みを持つことばであり、すべて物事はこのようにあらねばならないと言っている。井上靖がこのような大切にされた言葉に、私もこの研究会の者齊しく思いを潜めて研鑽に努めなければならないと思う」と研究会の目的を述べたあと「本日は井上ふみ様にわざわざお出でいただき、のちほどお言葉を頂戴します。日頃からのご助言、ご助力に感謝します」とお礼を述べた。井上ふみさんは会長の挨拶のあと、あらかじめ原稿にまとめた「靖とわたし」を読みあげられ、「研究会が発足して嬉しい」と挨拶、参加者から大きな拍手が送られた。当日は六十数名の出席者があった。

平成三十一年二月に亡くなった荻久保泰幸先生（國學院大學名誉教授）は八十八歳だった。私は平成三十年の暮れに米寿のお祝いを申し述べた。そのことでお電話をいただいた。ご無沙汰していたので懐かしいお声だった。研究会で一緒だったとはいえ、大学での私

の卒業論文の先生であった。まさかそのまま大学の職員として就職するとは思ってもみなかったので、「卒業したら残りを書きます」とか言って、既定の枚数位を出して、お情けの点をもらったと記憶する。学内でお会いする先生の背中に「卒論」の字がしばらく消えなかった。

平成六年に「帰郷」で直木賞を受賞した海老沢泰久氏も萩久保先生の教え子だった。海老沢氏が受賞の言葉を学内の新聞に書いてくれたなかに「小説にかぎらず、文学作品というの他人に読んでもらって初めて完結するものだから、書いた以上は誰かに読んでもらわなければならなかった。ぼくは岡野弘彦先生のところにもっていった。(中略)萩久保泰幸先生にもずいぶん読んでいただいた気がする」とあり、岡野先生にも萩久保先生にもこんどのことでその何十分の一くらい恩返しできたと思っている、と書いている。その海老沢氏は先生より先に、平成二十一年十二月に若くして逝ってしまった。

萩久保先生には明治時代の主要な作家を論じた『文

学の内景——漱石とその前後』や、太宰治から井上靖、高見順、吉行淳之介、また高橋三千綱など現代作家を扱った『現代日本文学研究』という著作がある。

『文学の内景』はサブタイトルにあるように寺田寅彦、安倍能成、小宮豊隆、森田草平などいわゆる十弟子といわれる人々との交流を通して、漱石の人物像を透察しておられる。また、芥川龍之介、北原白秋、泉鏡花などを論じ、明治文学の特質を解明された。

『現代日本文学研究』では「昭和十年代の文学」「抵抗の文学について」「文学者の戦争責任論争」などの項目に見られるように、複雑化する昭和という時代を捉えて論じられた。「わたしにとって、同時代としての昭和を読み、昭和の文学を読むことは、とりもなおさず自分自身を確かめ、深めることであり、自己への試みである」(「あとがき」)と論述への決意を持っておられたことがわかる。

井上靖について、萩久保先生は、少年時代を過ごした伊豆湯ヶ島の風土がその後の井上靖の人生や文学に強い意識を植え付けているというお考えである。奥野

健男の「一見良識的で倫理的で健全な井上靖の作品を読むと、どこかに無気味なもの、凶々しいものつまりおそろしさを感じる」(「解説」『現代の文学12 井上靖』)という評価や、福田宏年の「井上靖は典雅な都会的紳士という定評めいたものがあるが、井上の作家的資質の本質は、むしろ論理的というよりは、野にひそむ生きものの臭覚に似た、詩人的な直観と感覚に支えられたものである」(「解説」『井上靖小説全集』第二十五巻)という評価をあげて、萩久保先生は「理知と情熱と、野性と都雅と、平静と陶酔と、現実的と理想的と——。北方的なものと南方的なものとの長所がたくみに調和され、融合されているところに井上文学の特質がある。そのような特質をつくりだした井上の資質をつちかっただ因子の一つが、「ふるさと」中伊豆の風土なのである」という視座をお持ちだった。萩久保先生も湯ヶ島がお好きだったようだ。

傳馬義澄先生(國學院大學名誉教授)がお亡くなりになったという知らせには驚いた。突然の衝撃である。

平成三十一年二月に亡くなった萩久保泰幸先生の葬儀にご一緒し、八王子の霊園での納骨にもお供した。三月三十日の萩久保先生の一周忌に誘われお伺いしますと言っていたのだが、私が二月二十日頃から体の具合が悪くなりお断りした。お会いする機会があったとすればその時が最後だったのかと思うと残念でならない。

傳馬先生のご専門は近代詩で、特に象徴詩に関する新鮮な考察がある。ご著書の『思索と抒情——近代詩文論』に収めてある「日本象徴主義の展開」で傳馬先生は「フランス象徴派の美学と、わが国のそれとが本質的に異質でなければならなかったことは、当然と言えば当然かも知れないが、日本の近代詩が読者を獲得していくためには抒情的な花鳥風詠の伝統的美学と折り合いをつけていかなければならなかったということ、いかに深刻な問題であることか」と言い、翻訳などで拡大変質されていく過程で、「その変質の歴史的必然性を実作と詩法のうえから検討していくことが、次なる課題となる」と提起されている。また同書の「象徴主義の継承と発展——白秋と露風の世界」では

北原白秋と三木露風の世界をあげ、外国の影響をうけながら時代とともに変化する日本の詩的歴史を指摘されている。

傳馬先生は荻久保先生のあとを承けて会長に就任したとき、井上靖文学についてつぎのように述べられたことがある。

井上靖の文学の魅力、それを清冽な詩情と壮大なスケールをもつ物語性にある、と一応はいつてみることもできるであろう。がその文学的本質とそれを培ったものについての検討はまだ十分になされてきているわけではない。(中略)井上靖の文学世界には、抒情性と叙事性、詩と小説とは微妙な重複圏を形成している。井上靖の文学について今後はもっと複眼的に、もっと多面的に、作品の細部へ踏み込んで研究されていかなければならないであろう。

(『研究会の三年目にあたって』『井上靖研究会会報』第三号)

すこし長いが紹介しておきたい。

かつて詩人たちは、自己の内部の肉声の表現に、その内部構造の変革に一身を賭けていたはずである。(中略)われわれはもう一度「何のために詩を書くのか」ということを熟考してみる必要がある。われわれの詩に意義を与えるわれわれの生活を見失いたくないからである。たやすく詩化されたり、たやすく小説化されたりするところに、どのような生活があるか、ということとは不断に反省されねばならないからである。時代を拓いていこうとする情熱もなくいたずらに自足して事足れりとするような作品は、私にとつてはほとんど無縁にひとしい。

(『焰』第八十四号)

私も詩を書く者として、また選考委員のひとりとして、このことを重く受けとめた記憶がある。

しかし、傳馬先生はいつも厳しいことだけを述べられたわけではない。

そして井上文学はヨーロッパはもとより、中国、アメリカ、ロシアなどで翻訳され国際的評価を得ていると言ひ、私たちが「その総体を見わたしその細部に分け入って検証する作業は、引いては昭和文学全体の文学的相貌を明らかにする可能性をあぶりだしていくにちがいない。本研究会はそのことを目的として一層活発な活動を展開していくことができればと願っている」と荻久保前会長のあとを承けた責任を述べている。

傳馬先生は福田美鈴さん、金子秀夫さんが主宰する「福田正夫詩の会」が出している詩誌『焰』の「福田正夫賞」の選考委員を長くつとめられた。井上靖先生と福田正夫氏の関係についてはここで詳しく述べることもないが、井上靖先生が若い頃にたいへんお世話になった詩人である。福田美鈴さんはその四女である。井上靖先生も亡くなるまで『焰』の同人として毎号詩を書き、福田正夫賞の選考もなされた。

傳馬先生がある年の選評で、詩の研究者として詩を書く人に向けて強い意向をしめされたことがある。それは詩や文章を書く者にとつて大切なご意見だった。

たとえばある受賞詩集には「やわらかい、無理のないことばで、日々の暮らしのなかで、感動した折々の喜びや悲しみを表現し、観念的で空疎な言葉遊びなどはひとつもない、温かい、しかし芯の確りした体温の感じられることばによって何の銜いもなく詩篇が綴られている」と、すぐれた詩集には「このように選評い言葉をかけられた。作者にとつてはこのような選評は、これからの人生に光りをもらったようなことばだと思ふ。」

傳馬先生は荻久保先生を大変尊敬してらして、荻久保先生の著書のあとがきには必ず「家族ぐるみの友人傳馬義澄氏の力を借りた」とか「傳馬義澄さんのご芳情とご尽力とによる」などと書かれているように、何をおいても献身的であった。

傳馬先生は多趣味の人でもあった。バイオリンの奏者としては趣味を超えていた。頼まれてコンサートにもお出になったりした。学会では中原中也の会理事・副会長、芸術至上主義文芸学会参与も務められた。七十九歳で逝かれた。寂しいかぎりである。

## 第四回 井上靖記念文化賞

宮本輝氏・岡野弘彦氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人又は団

体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しました。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯、各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

第四回井上靖記念文化賞の選考委員会は、令和二年二月十五日に東京ドームホテルにて行われました。贈呈式は、新型コロナウイルスの感染予防の観点から、本年は中止となりました。

### 第四回 井上靖記念文化賞

宮本輝 (みやもと・てる)

作家

贈賞理由「『泥の河』以来、戦後の市井の人々の姿と情感を描き尽くした希代の物語作家」



受賞のことは

原点に立つ

私は昭和二十二年に生まれました。戦後の貧しさはつづいていて、物心ついたころから家のなかで遊んでいたという記憶はほとんどありません。少々の雨が降ろうとも、外で走り廻って遊んでいました。テレビも高価で手が出ず、電子ゲーム機器などが登場してくることさえ想像もできなかった時代です。

家で楽しめる遊び道具というものが少なかったお陰で、体が弱くてすぐに熱を出す私は本を読む少年になっていきました。

中学生になると、私が本好きであることを知った近所のおじさんが一冊の小説を貸してくれました。井上靖先生の名作「あすなる物語」でした。

そのころ、父の商売の失敗を発端として、我が家は暗い時代を迎えていました。両親の不和と借金取りに追われる日々からの逃避だったのでしよう。私は何から隠れるようにして、押し入れのなかで「あすなる

物語」を読みふけりました。おとなの読む小説に初めて接したのです。読み終わって、小説とはなんとすばらしいものかと思いました。

二十七歳のとき、精神的な病気に苦しんでいた私は、不意に小説を書きたくなりました。心の奥底に眠っていた「あすなる物語」が静かに動きだして、私の背を押したのだといまは確信できます。

そんな私が井上靖記念文化賞を受賞させていただけるなどというのは、まったく夢のようだとしか言い様がありません。私は再び原点に立つことができます。選考委員のみなさまに心からお礼申し上げます。

#### 経歴

一九四七年 兵庫県神戸市生まれ

一九七〇年 追手門学院大学文学部卒業。サンケイ広告社入社、コピーライターとして企画制作部に配属

#### 属

一九七五年 サンケイ広告社を退社

一九七七年 『泥の河』で第十三回太宰治賞

一九七八年 『螢川』で第七十八回芥川龍之介賞

一九八一年 映画『泥の河』（小栗康平監督）がモスク

ワ国際映画祭銀賞

一九八二年 『流転の海』が月刊誌『海燕』で連載開始

一九八七年 『優駿』で第二十一回吉川英治文学賞

二〇〇四年 『約束の冬』で第五十四回芸術選奨文部科

学大臣賞

二〇〇九年 『骸骨ビルの庭』で第十三回司馬遼太郎賞

二〇一〇年 紫綬褒章

二〇一八年 三十七年の時を経て『流転の海』シリーズ

ズ全九巻が完成

二〇一九年 『流転の海』全九巻で第六十回毎日芸術賞

二〇二〇年 旭日小綬章

#### 主な著書

『泥の河』『螢川』『星々の悲しみ』『道頓堀川』『錦

繡』『青が散る』『流転の海』『葡萄と郷愁』『優駿』

『約束の冬』『にぎやかな天地』『骸骨ビルの庭』『水

のかたち』『田園発 港行き自転車』など

#### 選評 時代と社会の語り部

川村 湊

デビュー作の『泥の河』（一九七七）から『流転の海』全九巻（一九八二～二〇一八）に至るまで、宮本輝は、常に戦後の社会に生きる庶民の姿と情感を描き尽くす、時代の語り部としての物語作家だった。

とりわけ、足掛け三十七年という長い時間を費やした大河小説『流転の海』は、彼の代表作であり、松坂熊吾とその妻の房江、そしてこの二人を父母とする息子の伸仁の三人家族を中心に、敗戦後の焼跡・闇市から朝鮮戦争、高度経済成長、日韓・日朝問題、モータリゼーション、ベトナム戦争、文化大革命などの「戦後」の国内外の社会的事象や激動の変化を背景としながら、戦後の日本人がどのように生き、死んでいったかを丸ごと提示しようという大胆で壮大な試みをはらんだ小説だった。

ここに私たちが通過してきた時代と空間に生きてきた人々のすべての肖像が集められている。成功者と失敗者、善男善女が登場するかと思えば、悪漢・悪党が

跳梁跋扈する。社会には光と影があつて、はじめて立体的でリアルな作品空間が構築されるのだ。

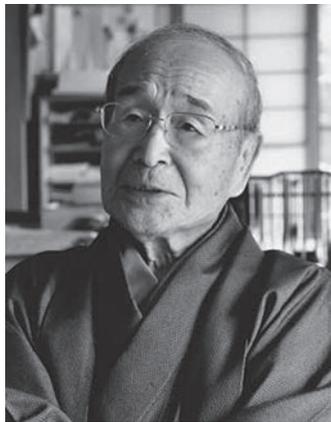
そこに貫かれているのは、すべては有為転変し、流転してゆく変化そのものだ。思えば、宮本輝の小説は、大都市のなかを流れる、泥の河から、時には激しく、時には穏やかな水の流れが、流転しながら大海へと注いでゆく、水の変奏のような世界だった。もちろん、そこには燃え盛る火もあれば、猛烈な風も、豊かな緑の森も野もあった。宮本輝は、この作品を最初は自らの父をモデルとして書き始めたという。しかし、それは書き続けているうちに、個人や個的な家族の物語を超え、戦後（昭和後半）の日本社会そのものを全体的に描くことへと向かっていったのである。

しかし、この代表作として的大河小説も、作家・宮本輝にとつて、一つの里程碑でしかないだろう。偉大でありながら卑小な父親の死の後も、その子どもたちは、生き続けてゆかねばならない。平成、令和と揺れ動いてゆく時代と社会の庶民の姿を、作家がこれからも作品化してゆくことに疑いはないのである。

岡野弘彦（おかの・ひろひこ）

歌人、國學院大學名誉教授

贈賞理由「我々の夢も思想も『神話』から発している。今も昔も『神話』に近づくには「歌」しかない。その「歌」の傑出した創造者としての業績に対して」



受賞のことは

井上さんは一九〇七年のお生まれで、私は一九二四年の生まれ。井上さんが幼時のことを書かれた「あすなる物語」や「しろばんば」に心を引かれた。井上さんが、祖母と二人で伊豆で暮らした記憶を書いた随筆「蔵の家」の、小さくひっそりとした様子が好きだった。私も山の奥の一軒家の神主の家に生まれ育って、妹や弟が育ってくるまでは、独りでひっそりと寂しかった。井上さんと山本健吉さんと私が、東京都知事の招きで、硫黄島の戦死者の慰霊訪問に同行したことがあった。船で運ばれる前夜、一泊して体を整え、アメリカの船で硫黄島へ。井上さんは旧制高校時代は柔道の選手で、体を敏速に動かして調整していられた。いよいよ島の壕を案内される段になると、実にきびきびと身を動かして、要所を見て回られた。そういうときの井上さんの目の運びの鋭さが印象的だった。

更に後年、井上さんが宮中歌会始の儀に召歌を詠まれた。内容は、今は戦蹟となったモンゴルの風光を詠まれた歌だったが、歌会の日、前もって昭和天皇にそ

の歌の地理的内容を説明される話をおそばで聞いていて、井上さんの地理的な把握と、その御説明の正確さに、感心させられたことが記憶に深く残っている。

敬愛する井上さんにゆかりの賞をいただくこと、まことに、光栄なことと感謝申し上げます。

経歴

一九二四年 三重県生まれ

一九四八年 國學院大學国文科卒業。学生時代から釈

迢空（折口信夫）主宰の短歌結社「鳥船」に参加。

私淑して折口家に同居し、歌人として創作活動を

開始

一九六八年 第一歌集『冬の家族』で第十一回現代歌

人協会賞

一九七三年 『滄浪歌』で第七回迢空賞

一九七九年 『海のまほろば』で第二十九回芸術選奨文

部科学大臣賞。宮中歌会始の選者に就任（二〇〇八年まで）

一九八三年 宮内庁御用掛として皇族の歌の指導・相

談役を務める（二〇〇七年まで）

一九八八年 『天の鶴群』で第三十九回読売文学賞。紫

綬褒章

一九九八年 日本藝術院賞。勲三等瑞宝章

二〇〇一年 『折口信夫伝 その思想と学問』で第十四

回和辻哲郎文化賞

二〇〇七年 『バグダッド燃ゆ』で第二十二回詩歌文学

館賞及び第二十九回現代短歌大賞

二〇一三年 『美しく愛しき日本』で第四回日本歌人ク

ラブ大賞。文化功労者

主な著書

『冬の家族』『折口信夫の晩年』『滄浪歌』『海のまほ

ろば』『天の鶴群』『折口信夫伝 その思想と学問』

『バグダッド燃ゆ』『美しく愛しき日本』『岡野弘彦百

首』など

選評 岡野弘彦氏の受賞に寄せて

辻原 登

日本文化Ⅱ 日本語は、現代と古代に橋を渡す人を常に必要として来た。本居宣長や折口信夫がそうだ。そのような存在を今の時代に望むなら、岡野弘彦氏を措いていない。

日本語には何度も滅亡の危機があった。記紀万葉の時代がそうであったし、明治維新も、一九四五年の敗戦も、日本語が消えてもおかしくない状況だった。そして、今また四度目の危機に遭遇しているし、より深刻かもしれない。過去の危機を克服する砦となったのは、常に「歌」であった。

「記紀万葉」の時代の人々は、「歌」を後世に残すために、外国語である漢語から音訓併用の日本語を創設したのである。

近代で、「古代」に最も通じた心を持った人・折口信夫に全心全霊を挙げて師事した岡野氏は、「人間社会では古代に遡るほど言葉の力は大きい。言霊とは、言葉のかたちで発揮される魂の力、霊力です」と語る。

### 第一回受賞者

菅野昭正（世田谷文学館館長・文芸評論家）

小田 豊（六花亭製菓株式会社前代表取締役社長）

### 第二回受賞者

芳賀 徹（東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター

名誉教授）

織田憲嗣（東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネ

ーター）

### 第三回受賞者

大城立裕（作家）

伊藤一彦（歌人・若山牧水記念文学館館長）

その歌業には、「言霊の幸はふ国」（万葉八九四）のエッセンスが籠められている。

氏は関東大震災の翌年の生まれで、太平洋戦争で徴兵、学徒出陣を経験した。大正、昭和、平成、令和四代を生き抜き、一九八三年（昭和五十八）から二〇〇七年（平成十九）まで皇室の和歌御用掛を務めた。その歌群と論述の質と量は他の追隨を許さない。一首だけ引く。

美しくかなしき日本。わが胸のほむら鎮めて 雪ふりしきる  
（『美しく愛しき日本』）

井上靖記念文化賞特別賞にこれほど適しい方はいない。

### 井上靖記念文化賞選考委員会委員

川村 湊（文芸評論家・政法大学名誉教授）

栗原小巻（女優・日本中国文化交流協会副会長）

酒井忠康（美術評論家・世田谷美術館館長）

島倉朝雄（北海道新聞社編集局文化部長）

辻原 登（作家・県立神奈川近代文学館館長）

（五十音順）



# 村はずれ

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、別府大学教授・井上靖研究会会長の高木伸幸氏に監修をお願いして、順次紹介していくものです。

今回紹介する「村はずれ」(神奈川近代文学館所蔵)は、宝塚少女歌劇二十周年記念の懸賞脚本への応募作で、戦後の井上靖のイメージからは大きく逸脱するドタバタコメディの舞踊劇台本です。執筆は一九三三年三月頃、当時、二十代なかばの井上は、盛んに懸賞創作に応募しており、本作もそのひとつです。自身の可能性を様々なジャンルで試そうとしていた、文壇登場以前の試行錯誤の痕跡といえるでしょう。本草稿は応募直前のほぼ完成稿で、資料として貴重であると共に、娯楽作品として楽しくお読みいただけると思います。

原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いや振り仮名はそのままとしました。明らかな誤字・脱字・衍字・句読点の漏れ・形式上の不統一などについては、断りなく直しました。また、今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句の使用がありますが、時代背景を考慮しそのままとしています。

宝塚少女歌劇応募脚本

舞踊劇(註 厳密ノ意味デハ歌劇・舞踊劇・科白劇、三者混合せん歌舞劇)

## 村はずれ

冬木荒之介

一九三三・二・十一

陸軍記念日

合唱 へおお、こわや

狐のなくのは、こんな晩

おお、こわや

狐のでるのは、こんな所ところ

和尚様の言ひつけで

お酒の肴の油揚げを

里まで買ひに出は出たが

とつぶり暮れたこの広野

ほんに

尾花が化けやせぬか

この歌と一緒に寺の小坊主了心、左手より踊り乍ら出てくる。短い袈裟を着て、素足に足駄ばき。

了心独唱 へあつちで、ごそごそ

登場人物

了心(小坊主)

半六(酒屋の丁稚小僧)

惠念(寺の住職)

狐(一)

狐(二)

狐(三)

時代

むかし

場所

野原の一本道

とお、こわや  
こつちで、ごそこそ  
とお、こわや  
合唱 へこわや、こわやで

三丁の道を

生きた気もせで、来たものの  
是から里まで  
まだ三丁

了心独唱 へ行きも、こわ、こわ、  
帰へりも、こわや

間奏

合唱 へひゆうろ、ひゆうろと

風がふく

破れ衣を、風が吹く

かさり、こそりと

落葉が落ちる。

まるめた頭にふりかかる

了心独唱 へこんな晩には、

しみじみと

寺へ寄越した

おふくろの

その心根が

うらめしや

間奏

了心踊り乍ら手を翳して右手を眺める

了心 『はて、いぶかしい。この野中の一本道を、今頃、

とほとほと歩いてくる奴。』

合唱 へなるまいぞ、なるまいぞ、

油断はなるまいぞ

了心独唱 へほんに油断はなるまいぞ

了心 『若しかしたら、狐狸の類かも知れない。おおお

お、こうしてはゐられない。南無、南無、南無

阿弥陀仏南無阿弥陀仏』

了心あはてふために樹蔭に匿れる

合唱 へおお、こわや

狐の嫁入、こんな晩

おお、こわや

狐の寄合、こんな所とこ

御主人様にしかられて

お寺へ届ける徳利とくぐりを

しぶしぶ持つて出は出たが

とつぷり暮れたこの広野

ほんに、

すすきが、化けやせぬか

この歌と一緒に、村の酒屋の丁稚小僧半六、踊り乍ら出  
てくる。一升徳利を持ち半纏着。素足に草履ばき。

半六独唱 へうしろを向くな。

おお、こわや

聲音たてるな

おお、こわや

合唱 へこわや、こわやで

三丁の道を

生きた気もせで来たものの

是から寺まで

まだ三丁

了心独唱 へ行きも、こわ、こわ

帰へりも、こわや

寺へ寄越した

おふくろの

その心根が

うらめしや

間奏

了心踊り乍ら手を翳して右手を眺める

了心 『はて、いぶかしい。この野中の一本道を、今頃、

とほとほと歩いてくる奴。』

合唱 へなるまいぞ、なるまいぞ、

油断はなるまいぞ

了心独唱 へほんに油断はなるまいぞ

了心 『若しかしたら、狐狸の類かも知れない。おおお

お、こうしてはゐられない。南無、南無、南無

阿弥陀仏南無阿弥陀仏』

了心あはてふために樹蔭に匿れる

合唱 へおお、こわや

狐の嫁入、こんな晩

おお、こわや

狐の寄合、こんな所とこ

間奏

合唱 へひゆうひゆうと

風が吹く

すいたお腹にしみ渡る

かさかさこそろりと

落葉がおちる

足の戦アカギレに

ぢやれかかる

半六独唱 へお米、とぐのが

まだ、ましぢや

おみそするのが

まだ、ましぢや

これなど女房の寺への使

おふくろ

知つてか！

又は、知らないでか！

間奏

半六踊り乍ら樹木のそばを通りかかる時

了心、樹蔭からのぞく。

了心 『半どんだつたか』

半六（ふりかへつて）『ヒヤツ！』

了心 『半どんだつたか、やれやれ、寿命が五年程ちぢまつたわい。』

半六（逃げ腰になり乍ら）『えへん、化かそうつたつて、その手にのるものか。やい、狐、さあ、とつと、失せればよし。失せなげや、痛いめに合せてやるぞ。』

半六、見得を切り乍ら、逃げ損じて次第に後退さりして行く中に、木の根につまづいて、倒れる。そしてその儘、気を失ふ

了心 『狐!? 笑談ぢやあないぞ、半どん。是此通り。』

正真正銘の了心御坊ぢや

了心、半六の手を引張つて起そうとする。

了心 『おい、半どん、どうした。おや！ 気を失うてゐる。あははははは、大きな事を言ふそのしりからこのざま！ あははははは、おおでも、半どんで助かつたわい。』

是が若し狐だつたら、今頃、このわしもどんな

眼に遇つてゐる事ぢややら。南無大師遍照金剛  
南無大師遍照金剛

間奏

了心、半六を抱き起し背をたたく。半六、漸く正気にかへる。

半六 『ああ、やつぱり、本ものの了心か』

了心独唱 へあはれ、凡夫のあさましさ

名僧高師の了心様の

御姿みえぬか、

なさけなや

九品念仏くぼん、唱へてあれば

狐狸こんくわいも

石ころ、木ざれ

了心 『あははは。恐い恐いと思つてみれば、すすきも幽霊。怖しい怖しいと思つて見ればこそ、この了心までが狐に見えると言ふものぢや。いいか、喃、半どんこの現世うつよには心の鬼より他に怖るべきものは何一つありはせぬ。』

半六 『チエツ！ 何をさらす。了心、おぬしだつて。』

了心 『いや、その弁解は聞かぬ聞かぬ。』

さあ、是から儂の事を、小坊主だの、茶坊主だの言つてみる。』

合唱 へ今の始末を、

かくかく

しかじか

了心独唱 へ四十二軒の村の衆にふれる

半六独唱 へそいつはたまらぬ

そいつはたまらぬ

間奏

了心、半六、踊る

合唱 へ二人でゐれば、何が、怖おそ

二人でゐれば、何が、怖おそ

了心半六合唱 へ狐狸こんくわいが何が、怖おそ

尾花のお化けが何が、怖おそ

合唱 へ見渡す限り、漂渺の

げに、美しき広野原

すすき、かるかや、をみなへし

秋の七草、そが中を

了心半六合唱 へつづれ させ させ

つづれさせ

合唱 へ今宵を命の虫の声

半六 『時に了心、おぬしは一体何処へ行くのぢや』

了心 『おおそうそう、すつかり忘れてゐたわい。和尚様の寝酒のお肴の油揚げを、里まで買ひに一走り、

して、半どんは?』

半六 『それ、それよ。その寝酒とやらを今、お寺に届けに行く所だ』

了半 『では、半どんは寺へ、わしは里へ。そうぢや、こうしてはゐられぬわい。遅くなると』

了心独唱 へ和尚さまが、

半六独唱 へ御主人さまが、

了心半六合唱 へ青つの 赤つのによきりと立てて

大きな白眼を

むき出して

へこれ、これ

合唱 へここで油を売りおつた

幾度、言つても、解らぬ奴にや

こんや一晚、ご飯はあげぬ

了心 『さあ、では、ぼつぼつと出掛けるとしよう。半どん、行つたり行つたり』

半六 『行かいでか、おぬしも早く出掛けた出掛けた』

了心 『さあ、早く、半どん』

半六 『わしの事ばかり心配せずに、おぬしから先きに行つたら、いいわい』

了心独唱 へさては、半どん

怖いと、みえるの

半六独唱 へそう言ふ、おぬしこそ、

どうやら、どうやら、

了心 『では、一度に別れる事にしたらどうぢや』

半六 『なる程、それは妙案、よし二二三で別れると

せう』

間奏

了心は右を向き、半六は左を向き、脊中を合せる

合唱 へおお、さむ、

こゝろむ、

脊中、合せの寒さかな

了心半六 『いいか一丁目の、ほら二の、三』

了心、半六、共に動かず、そつと振向いて顔を合せる。

半六 『了心、どうした』

了心 『おぬしこそどうした』

了心半六 『いいか一丁目の、ほら二の、三』

了心、半六、今度も動かないで、再び、そつと振向いて顔を合せる

了心半六 『三度でた目の、勝負だ、勝負だ。一、二の三。』

寂しい間奏。

了心は右に、半六は左に三四歩、歩いて立止り、そつと振向いて顔を合せる。そして、各自、静かに踊り出す。

了心独唱 へ行けと言ふても

おいらは知らぬ

合唱 へここから里まで、三三丁の道は

人つ子通らぬ、杉のき林

夜毎、夜毎に

お女中が出でて

ふんわり、ふわりと、

お女中が出でて

髪をくわへて招くそな

半六了心合唱 へそうな、そうな。

ニヤリ笑ふて招くそな

半六独唱 へ行けと言ふても

おいらは知らぬ

合唱 へここから寺まで、三三丁の道は

昼も小暗い、墓場の小道

夜毎、夜毎に

青い火がもえて

とんとろ、とろりと

青い火が焼えて

すうつと流れて消えるそな

了心半六合唱 へそうな、そうな

頭の上で消えるそな

合唱 へ是と言ふのも、みなあの和尚

思や、思ふほど、

和尚がにくや

和尚、にく、にく、

袈裟までにくや

了心半六合唱 へ寺の御門に、

蜂、巢をかけよ

了心独唱 へ和尚、出りや、させ

半六独唱 へ入りや、させ、させ

了心半六、踊つてゐるうちに、静かに月が出て、舞台一

面に青い月光がそそぐ。

合唱 へこん、こん、

こんこんこん

しろがねの

光そぼふる月夜なり

秋の夜長の、つれづれに

うかれ狐の、うす化粧

こん、こん

こんこんこん

この歌と一緒に、狐(一)、寺の住職恵念に化けて左手より表はれる。袈裟姿、白足袋、足駄ばき、手には珠頭、杖を持つてゐる。袈裟のうしろから大きな尻尾が出てゐる。

狐(一) 『おお、そこにあるのは了心と半六』

了心半六（驚き尻もちをついて）『あつ！ 和尚さま』

狐(一) 『また二人とも、此の様な所で道草をしをるな』

了心、半六、狐(一)のそばにかけより衣にすがる

了心独唱 へでも、淋しうて

半六独唱 へ淋しうて

了心半六合唱 へなりませぬ

狐(一) 『ほう、まだ年端も行かぬお前たち。寂しいのも

無理はないわい。半六は、是から里まで送つて

進ぜう程に、安心するがいい。それから了心は

わしと一緒に寺に帰へらつしやい。』

了心半六 『和尚様、そりや、ほんとでござりまするか』

狐(一) 『あはははは。ほんとともほんととも。お前たち

を偽いても何の利益やくもありはせぬわい』

了心、半六、喜び飛上り踊り出す

了心半六合唱 へこんなやさしい和尚さま

了心独唱 へ日がな一日、

がみがみ、がらがら

いつものいじわる和尚とは

思はれぬ

半六独唱 へ年百年中

べろべろ、ぐでぐで

いつもの生臭和尚とは

思はれぬ

了心半六、踊つてゐる間に狐(一)、叢に姿をかくす

間奏

合唱 へこん、こん

こんこんこん

しろがねの

光そぼふる月夜なり

狐塚よりうかれでし

うかれ狐の、この手管

こん、こん

こんこんこん

この歌と一緒に、狐(二)、前の狐(一)と同じ姿で左手より表はれる

狐(二) 『おお、そこにあるのは了心と半六』

了心半六（驚き尻もちをついて）『あつ！ 和尚様』

狐(二) 『また二人とも、この様な所で道草をしをるな』

了心半六（眼をパチクリさせ乍ら）『和尚様、とぼけては

いけません。たつた今……』

狐(二) 『おお、おお、そうぢやつたか、年はとりたくな

いものぢや』

了心 『あはははは』

半六 『あはははは』

了心半六、再び踊り出す

了心半六合唱 へ年はとりたく

ないものぢや

この間に、狐(二)、叢に姿をかくす

間奏

合唱 へこん、こん

こんこんこん

しろがねの

光そぼふる月夜なり

秋虫の音にさそはれし

うかれ狐の、和尚姿

こん、こん

こんこんこん

この歌と一緒に狐(三)、前の狐(一)狐(二)と同様の姿で左手より表はれる。

狐(三) 『おお、そこにあるのは了心と半六』

了心半六（驚きしりもちをついて）『あつ！ 和尚さま』

狐(三) 『また二人とも、この様な所で道草をしをるな』

了心（首をかしげ腕を拱ぬいて）『はてな』

半六（同前）『はてな』

了心半六合唱 へはて、はて、はてな

その間に狐(三)、叢に姿をかくす

了心 『喃、半どん、和尚さまが二度も向ふから』

半六 『来ては消え、来ては消え』

了心半六（互にだきつき乍ら）『おお、どうせう』

半六 『喃、了心、この分だと、まだ幾人、和尚さまが

向ふからやつて来るかもしれない、喃、了心。

どうせうぞ、なあ、どうせうぞ。』

了心 『おおこわ、こわこわ、南無、南無、南無、南無阿弥陀

仏南無阿弥陀仏』

間奏

合唱 へ酔ふた気持は煩惱解脱

徳利、枕のうたたねは  
一切成仏、極楽往生

間奏

合唱 へ酒がなくなりや

地獄の責苦

住職 惠念、左手より出で来る。尻尾のないのを徐げば全  
く狐(一)(二)と同じ姿。

惠念 『おお、そこにあるのは了心と半六』

了心半六 『ヒヤツ！ そりや来た』

惠念 『こりや了心、どんと打つたが鉄砲玉、待てど暮

せど帰へりやせぬ、とは、おぬしのこと。半六

も半六、酒もとどけずに何をしをる！ ええ、

今日と言ふ今日は二人とも、精根のつく程……』

了心半六 『ヒヤツ！ 助けて！』

了心、半六、逃げ迷ふ。かかる内、了心、路傍の棒を拾

ひ、夢中になり惠念を打つ、惠念、その場に崩れ坐る。

惠念 『おお、これ、これ、了心、狂ひをつたか！』

了心 『半どん、早く縄ぢや、縄ぢや』

半六、縄を叢より探して来て惠念を縛る。

惠念 (もがき乍ら) 『こりや、白痴め、何をする、こり  
や、何をしくさる』

了心 『ええ、聞かぬわい、古狐め』

惠念 『な、なんと』

半六 『なんとも、へちまも、あるものか。もう縛り上

げた上は』

了心半六合唱 へこつちのものぢや

惠念 『これ、ばかものめが、師を縛つて何とする』

了心 『だめぢや、だめぢや、そんな口車にのる了心様

とは違ふわい。さあ、こりや、しつぽを出せ』

半六独唱 へさりきり、出せ

惠念 『違ふ違ふ、わしは惠念ぢや、真正正銘の惠念ぢ

や、ああ、いたい。早う、縄をといてくれ』

半六 『あははは、あきらめの悪い狐ぢやな。よし、わ

しが化の皮をひんむいてやる』

了心 『化の皮をひんむくとは、半どん、一体、どうす

る積りぢや』

半六 『なに、わけもない事。それぞれ、狐は頭をたた

かれると、きつと、コンとなくそうな』

了心 『おお、それはいい所に気がついた。よし、儂か

ら先に倒してやらう』

了心、げんこで惠念の頭をたたき、と同時に、叢から三

匹の狐(一)(二)(三)が飛上つてなく。

狐(一)(二)(三) へこん、こん

こんこんこん

半六 『是は面白い、こんどは儂ぢや』

半六、惠念の頭をげんこでたたき。と同時に、再び、叢

から三匹の狐、飛上りてなく

狐(一)(二)(三) へこん、こん

こんこんこん

了心半六 『どうぢやこれでも、和尚様と言ひはるか』

惠念 『助けてくれ、和尚ぢや和尚ぢや』

間奏

了心、半六、踊る。

狐(一)狐(二)狐(三)、叢より出で来り、了心半六のうしろで踊る

合唱 へ月にうかれた古狐

稲荷五社

お使主かは知らねども

狐(一)(二)(三) へしろがねの光そほふる白夜也

こんこん

こんこんこん

了心半六、狐(一)(二)(三)、踊り狂つてゐる中を、遠時の鐘、淋  
しく聞こゆ。その余韻の中に、静かに——幕——

——一九三三・三・五一

(午前0時半)

京都市左京区吉田

神楽岡八ノ二四 足立方

井上靖

# 解説

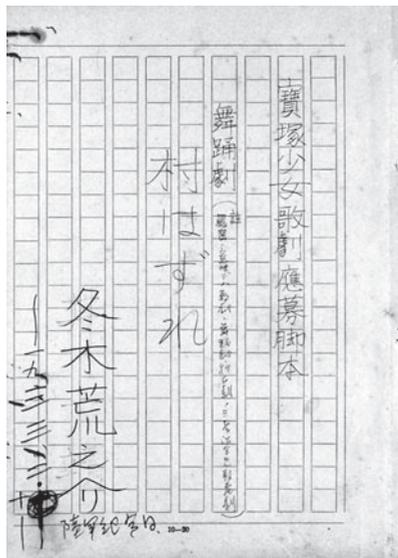
高木伸幸

宝塚少女歌劇二十周年記念として、『サンデー毎日』の主催により脚本が懸賞募集された。締切は一九三三年三月十日。「村はずれ」は、それに応募した原稿<sup>\*1</sup>であり、井上靖には珍しい舞踊劇の形式で書かれている。

筆名は冬木荒之介。東京文房堂製の四〇〇字詰原稿用紙を使用し、表紙と裏表紙に当たる二枚も含めて、分量は全体で二十三枚。他筆らしい丁寧な鉛筆書きの上に、井上靖本人による書き込みが見られる。原稿表紙にはタイトルの右横に「宝塚少女歌劇応募脚本」、筆名の左横に「一九三三・二・十一 陸軍記念日<sup>\*2</sup>」と記されている。本文末尾には「一九三三・三・五」（午前0時半）、裏表紙には「京都市左京区吉田神楽岡八ノ二四 足立方 井上靖」と記入されている。締切直前の二つの日付を見ると、本稿はおそらく最終的な下書きで、これをさらに清書したものを応募作として送

ったと推察できよう。応募者の現住所を「足立方」にしたのは、千葉亀雄賞を得た「流転」（一九三七年一月三・十日合併）二月二十一日『サンデー毎日』と同じである<sup>\*3</sup>。一九三五年十月に結婚する足立ふみとの関係がこの頃から深まりつつあったことを窺わせる。なお締切の翌月に発表された入選作の中に「村はずれ」は含まれていない<sup>\*4</sup>。

この「村はずれ」は現在確認される限り、井上靖が最初に執筆した脚本である。井上靖は一九三五年七月『新劇団』創刊号に戯曲「明治の月」を発表し、同じ年の十月には同作が上演されている。翌年二月には、映画監督野淵昶<sup>あきら</sup>とともにシナリオ「尾上伊太八」を書いたという井上自身の証言もある。また一九三五年十月に上映された映画「白銀の王座」（内田吐夢<sup>とむ</sup>監督）の脚本は、実は井上靖が大きく関わっていたであろうことについて、近年詳しい検証が為された<sup>\*5</sup>。これら三作はいずれも新興キネマ脚本部在籍の時代（一九三四年四月〜一九三六年七月）に書いたものであった。「村はずれ」は、これら三作より二年以上も遡る。新興キネマ



「村はずれ」草稿（表紙・裏表紙・8枚目）

脚本部の在籍開始から見ても、約一年早い時点での創作であった。井上靖が詩や小説に加えて、脚本にも取り組み始めたのは、新興キネマ脚本部に籍を置いたからでなく、それ以前から脚本にも興味を持っていたためであった。本稿はそのことを示す貴重な資料と言える。

「村はずれ」の主人公は小坊主の了心。日が暮れてから、和尚・恵念が寝酒の肴にする油揚げの肴に行かされる。了心はその途中、和尚の酒を届けにきた酒屋の丁稚であり、友達の半六と出会う。二人とも暗い夜道で狐が怖く、一緒に離れられずいると、尻尾の生えた和尚が連続して三匹登場。了心と半六は狐に化かされていくと気付くが、その後に出て来た本物の和尚を狐と勘違いしてしまう。和尚を縛り、頭を叩いて終幕となる。

主役級の二人が少年であるのは、宝塚少女歌劇への応募を考慮した故だろう。若い女性が扮しやすいのは大人の男性よりも少年役だとの判断かと思われる。歌劇である故に、合唱・独唱が随所に挿入されているも

の、どのような音楽を井上靖が想定していたのか文面だけでは見えてこないのが残念である。

当脚本がドタバタ喜劇のごとき作風を見せている点にも注目したい。井上靖は一九三三年九月、ユーモア小説「三原山晴天」で『サンデー毎日』懸賞募集の選外佳作に選ばれる。翌年三月にも、やはりユーモア小説「初恋物語」で、同じ『サンデー毎日』懸賞募集に入選している。<sup>\*8</sup>他にも同じ頃に、ユーモア小説の草稿二点（「就職圏外」「昇給綺談」）を書いていた。<sup>\*9</sup>「村はずれ」の作風は、これらユーモア小説に通じている。文壇デビュー後の井上靖は生真面目な作風を基本とし、どちらかと言えば、ユーモアは乏しかった。しかし、この「村はずれ」に表れているごとく、井上靖は決してユーモアに無関心だったのではない。その方面でも実は鍛錬を積んでいたのである。

もう一点、「村はずれ」では、小坊主・了心と丁稚・半六の夜道での心境、狐を恐れる心理に踏み込んでいる点に注意されたい。この少年たちの心境は、後年の自伝的小説「しろばんば」（一九六〇年一月～一九六二年

十二月『主婦の友』）を大いに彷彿させる。すなわち「しろばんば」では、豊橋滞在中の洪作が夕食後に迷子になり、夜道で大泣きしていると、通りすがりの男女から「迷子か、狐に騙されたか」と語り掛けられている。また洪作が杉林で動けなくなり、「神かくし」かと心配されるエピソードもある。こういった地方育ちの少年の、自然を超えた存在への恐れと畏敬の念が、「村はずれ」にもその一端を覗かせているのである。

井上靖が少年時代、土蔵とともに暮らしたおかの婆さんは毎日晩酌を楽しんでいたそうである。<sup>\*10</sup>幼い井上靖が、おかの婆さんの晩酌の肴を求めて夜道を歩いたこともあったであろう。井上靖の故郷、伊豆の山村・湯ヶ島の夜道は、子供にとって暗く恐ろしい、如何にも狐が現れそうな雰囲気であったに違いない。和尚の寝酒の肴を買いに夜道を歩かされる了心には、井上靖の少年時代の感慨が多分に込められているのである。

「しろばんば」のモチーフの源泉を秘めた一作として、井上靖には数少ない脚本として、本稿を楽しんで頂ければ幸いである。

\* 1 曾根博義「未発表初期作品草稿解説」（『井上靖展図録』二〇〇〇年四月、世田谷文学館）。

\* 2 陸軍記念日は三月十日。従って「一九三三・二・十」は、「一九三三・三・十」の誤記。

\* 3 藤澤全「若き日の井上靖研究」（一九九三年十二月、三省堂）。

\* 4 \* 1に同じ。

\* 5 井上靖「青春放浪」（原題「わが青春放浪」、一九六二年四月十一日～十七日『読売新聞』夕刊）。

\* 6 根本隆一郎「新興キネマ」脚本部時代の知られざる井上靖の世界（二〇一八年七月『井上靖研究』第十七号）。

\* 7 一九三三年十一月一日『サンデー毎日臨時増刊「新作大衆文芸」』掲載。

\* 8 一九三四年四月一日『サンデー毎日』掲載。

\* 9 高木伸幸編『井上靖 未発表初期短篇集』（二〇一九年三月、七月社）。

\* 10 短篇「グウドル氏の手袋」（一九五三年十二月『別冊文芸春秋』）などにそのエピソードは活かされている。

私が祖父母の家のそばのマンションに引っ越したのは、小学校にあがる前のことだった。住所は「世田谷区」だったが、誰もそこを「世田谷の家」とは呼ばなかった。「世田谷の家」は祖父母の家だったからである。親戚の中での話はもとより、家族内ですら「世田谷の家」は自宅ではなく、祖父母の家だった。

そんな「世田谷の家」は、マンションから徒歩圏内にあり、通っていた小学校の学区内でもあったため、私にとってはまずは遊び場所、ときには避難場所でもあった。泊まり込みの留守番を母が頼まれて、そこから登校することも多かった。当時の私にとっては、生活に溶け込んだ場所であり、そこは一般的な「おじいちゃんのうち」と同じであったと思う。

ただ、祖父は多忙な作家であった。日中は書齋にこもってなかなか出てこないのだが、お茶のおかわりなどでリビングに出てきて、そこに孫の誰かがいると、きまって「どこの子かい」と尋ねたもので、その祖父の挙動が面白く、私はそれを幼い頃拙い詩に書いたことがある。その詩は、昭和五十九年に祖父の喜寿を記念して作った『まるいてえぶるⅡ』という私家版の文集に載せてもらった。

「世田谷の家」に行くときは、その目的によって、「オフィシャル」か「アンオフィシャル」かに分かれていた。

「オフィシャル」とは、「プロジェクト井上靖」とで

も呼べるようなものであり、それは親戚一同一丸とな

って乗り越えるべき行事やイベントであった。両親やその兄弟は、祖父の仕事の関係者や友人への対応に追われることになる。祖父にとって「世田谷の家」は職場であり、会議室や交流場所でもあったわけで、会社でいうところの「総務労務関係」は親戚一同で担うほ

かなく、親の世代はさぞ大変であっただろうと思う。孫の世代も一応はホストの一員であったので、宴会の余興に「孫の一芸」と称して唄などを披露しなければならなかった。お客様に同じ世代の子どもがいれば、退屈させてはまかりならんという暗黙の視線が父から送られ、宴会のスペースから離れた二階などで静かに楽しんでもらえなければ、翌日父から雷が落ちた。

とはいっても、これら「オフィシャル」なイベントは大人の世界のお付き合い。孫の世代にはそれ以上の役目があったわけでもなく、親の手を煩わせたり、騒ぎすぎたりしなければ、自由にしていられた。ただ、いたずら盛りの私たちにとっては、「騒ぎすぎないこと」が一番難しく、最大のミッションであったかもしれない

いが。

お正月はお客様が大挙して押し寄せる「オフィシャル」な行事の最たるものだった。おせちは確かに豪華だったが、連日毎食となるとさすがに飽きてくる。中学校にあがった頃くらいから、おとなしくしていれば普段は食べさせてもらえないファストフードのハンバーガーのテイクアウトが許されるようになった。子どもたちにとっては、そんなことが大きな楽しみだった。子どもであっても、与えられた自由をわきまえて、自分で考え行動すれば怒られることもなかった。時代がどうのという以前に、祖父母の子育てに対する考え方がそのようだったのだと思う。

「アンオフィシャル」な場合とは、祖父が取材で外出するので留守番に行く、両親から頼まれてお使いに行くなどである。お客さんと呼ばず、親戚だけで集まることもあったし、どんな理由かは忘れたが、友達と一緒に遊びに行ったこともあった。マンションの鍵を忘れて学校に行ってしまう、帰っても親は留守にしてい

て入れない、お腹が空いてしょうがないので、お昼ご飯を食べに行くなんてこともあった。そんな時は、「オフィシャル」なときにもまして、祖母は寛容であった。子どもは子どもらしく元気に騒ぎまくればよろしいと思っていたのだらう。

祖母は十人の孫を授かっている。歳が離れた上の二人をのぞくと、九年間で八人が生まれた。それが一堂に会すわけで、幼い頃はほぼ保育園状態であったはずだが、遊んでいて怒られた記憶も、友達を連れてきて咎められた記憶もない。

どんなことをしていたかなあと記憶をたどってみる。家の中では、玩具の鉄砲で撃ち合いをしたり、ソファをひっくり返し、組み合わせてロボットごっこ。屋根や屏の上に登って忍者遊びもした。庭には、祖母が畑仕事用に準備していた資材がいろいろあったが、その竹竿で槍投げやチャンバラ（もちろん全て折れた）。竹を割って弓を作り、やはり畑仕事用の鉄製の支柱を矢にして弓矢遊び（当然全て曲がった）。庭には植木屋さんが切った枝が積んであり、的に困ることはなかった。

せになれるということなのだろう。周囲の眼や小さいことには気をとめず、好きなことに全力を注ぎなさい、と言われていたように思う。けれども、大人になった今となつてはそれが一番難しいのであつて、祖父には「言われた通りに生きてるよ」とはとても報告できそうにないが、少なくとも孫の世代はみな他人の目を過度に気にすることもなく、皆それぞれのやり方で自由に楽しく生活しているように思う。



「世田谷の家」の階段で祖父母やいとこ、親戚たちと。上段の同世代男子の一群の中、両手を頭上に出しているのが筆者だが（後ろに隠れた弟が手だけ出してピースしている）、この混沌とした雰囲気からして、祖父が「どこの子かい」と聞いてくるものかもしれないかなと今は思える（昭和57年元旦、二村次郎撮影）

枕投げなんていうかわいいレベルではなく、現在の都心部で同じようなことをしたら大目玉だろう。祖母は、自由に遊んでいる中で多少の怪我くらいはよい経験と思っていたのかもしれない。

何か言われた唯一の記憶は、竹棒の先にお菓子のついた紐をさげて、二階から犬釣りをした時だが、これも「かわいいそうなのはやめなさい」と諭されたくらいで、怒られたとはいえないレベルであった。

祖母はとにかく忙しく、孫にたくさん時間をかけられなかったことは間違いないが、かといって子どもにも興味がなかったわけではなく、限られた時間の中であたたかく接してくれていた。

孫の世代が口を揃えて言うのは、（多少のニュアンスは違えど）「将来は乞食（あるいは泥棒）でもいいからその世界で一番になりなさい」と晩年の祖父から言われたことである（「乞食」という言葉は今使われるがはばかれるが、祖父が言ったそのままということでお許しいただきたい）。自由になりたいことをし、それを極めれば幸

祖母が他界してからしばらくして、「世田谷の家」も解体されてしまった。集合場所を失い、頻度こそ減ったが、節目節目で親戚が集まる習慣は残った。毎回全員とはいかないが、今でもよく集まっている。

私たち孫世代も今やいい大人で、皆それぞれ子どもがいる。子どもは子どもだから当然騒ぐし、大人は大人だからついそれを怒りたくなくなってしまふ。もちろん怒らなくてはいけなときもあるが、所詮子どもものや

ること、祖母のように気にせずノンビリと過ごせたらと思う。

「世田谷の家」はもうないが、そこで繰り広げられていた、子どもが子どもらしく、元気に騒ぐあの空間と時間は、どこにでも作れるはずである。それを寛容に見つめていた祖父母の気質を、大人になつた私たちは受け継ぐことができているだろうか。

## 事業報告

理事長 井上修一

平成二十八年六月二十四日に本財団と旭川市が「井上靖記念事業の実施に関する協定」を締結し、井上靖の遺志を継いで我が国並びに地域の文化振興に寄与する目的のために協力して井上靖記念事業を実施することになりました。令和元年度も旭川市の「井上靖記念事業実行委員会」の全面的な協力を得て第四回「井上靖記念文化賞」をはじめ左記の諸々の文化事業を運営・実施いたしました。

## (一) 井上靖を記念する文化賞

第四回井上靖記念文化賞は、令和元年十一月一日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の推薦を募集し、令和二年二月十五日に東京ドームホテルに

て開催した選考委員会（選考委員・川村湊、栗原小巻、酒井忠康、島倉朝雄、辻原登）において、作家の宮本輝氏を井上靖記念文化賞に、また、歌人の岡野弘彦氏を特別賞に決定・発表いたしました。

受賞理由は宮本氏が「泥の河」以来、戦後の市井の人々の姿と情感を描きつくした希代の物語作家」に對して、岡野氏が「我々の夢も思想も、神話」から発している。今も昔も、神話」に近づくには「歌」しかない。その「歌」の傑出した創造者としての業績」に對しての評価によります。

贈呈式は、暖かくなつた令和二年五月に旭川において開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止となりました。賞状・賞品・賞金等

は、東京の移動自粛が解除されてから、十月二日に宮本輝氏に、翌三日、岡野弘彦氏に理事長が届けいたしました。

## (二) 国内外における日本文化の研究助成

## ○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」に研究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、ホームページ管理の助成を行いました。

## ○オーストラリア・ニュージーランド

平成十八年に、オーストラリア・ニュージーランドにおける日本文学の研究奨励のため、シドニー大学に設立した「井上靖賞」は、今年度で第十三回となり、ニュージーランドのクイーンズランド大学の Dr. Lucy Fraser の論文「犬と神と妖怪——馬琴の『八大伝』・昔話・伝説・現代の再話における人間と動物のつながり」が受賞しました。

令和元年十一月八日、シドニー大学・井上靖記念文

化財団・NSW豪日協会の主催で、シドニー大学の Old Geology Lecture Theatre にて贈呈式が行われました。本財団は本賞及び贈呈式実施に関わる助成をいたしました。

## ○ベトナム

平成二十七年度に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で開始した「井上靖賞・日本文学



「井上靖賞」受賞者の Dr. Lucy Fraser (中央)

研究論文コンテスト」は、平成二十九年度から三十年度にかけて第三回を実施しましたが、令和元年の第四回はベトナム側の都合で募集開始のみで、令和二

年度に選出し、受賞者を決定する予定です。

ベトナム語への翻訳出版助成に関しては、『猟銃』『しろばんば』の翻訳が始まっていますが、助成交付については図書出版後になりますので、来年度以降になります。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○本財団ホームページ  
更新と管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和元年七月十五日、『旭川市井上靖記念館報』第九号の発行に協賛

常設展示の他に、左記のような企画展四回を本財団と共催で開催し、企画展の見どころの紹介や解説のための「井上靖講座」も併催しました。

「井上靖 蔵書展Ⅰ——美術関連蔵書」（平成三十一年四月十三日～令和元年七月十五日）

「井上靖 人と文学Ⅹ——『おろしや国酔夢譚』執筆の

頃」展（令和元年七月二十日～十一月四日）

「井上靖 短編小説の世界」展（令和元年十一月九日～令和二年一月十九日）

「教科書に載った井上靖作品」展（令和二年一月二十五日～四月十九日）

「3・11文学館からのメッセージ——井上靖と台風」展（令和二年三月一日～三月三十一日）

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○井上靖文学館（長泉町）

常設展示の他に以下の二つの企画展を本財団の後援で開催しました。

「本のひみつ展 一冊の本ができるまで」（平成三十一年三月二十一日～令和元年九月二十四日）

「ふるさとへのメッセージ 井上靖 大岡信のことば」展（令和元年九月二十六日～令和二年三月十日）

(四) 近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行う他、井上靖の資料収集・調査研究を行っている当財団機関誌『伝書鳩』第二十号を十二月に刊行しました。

(五) 講演会開催事業

○令和元年七月二十七日

研究誌刊行とホームページ維持・管理に助成を行っている井上靖研究会の夏季研究会がホテル金沢兼六荘・会議室で行われ、本財団からも参加いたしました。研究発表「井上靖『敦煌』論」趙建萍氏（新疆大学講師・東京学芸大学客員研究員）

研究発表「物語の生まれる場所——『鬪牛』をめぐる」重里徹也氏（聖徳大学教授）

○令和元年十二月十五日

井上靖研究会の冬季研究会が國學院大学院友会館で行われ、本財団からも参加いたしました。

研究発表「『星と祭』復刊プロジェクトに関わって」明定義人氏（元長浜市立高月図書館長）

講演「日中交流の象徴・鑑真和上の誕生——井上靖『天平の菫』と安藤更正・山本健吉」藏中しのぶ氏（大東文化大学教授）

○令和元年十二月十五日

旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で第八回「井上靖記念館 青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象に実施されました。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館理事長）、島倉朝雄（北海道新聞社文化部長）の両氏です。今年度の募集テーマは「からだ」で、応募総数百七十件の中から中学の部六作品、高校の部六作品を賞に決定し、井上靖記念館にて表彰式を実施しました。

最優秀賞

中学校の部・鎌田真衣佳「力強く、気高い進化」（筑波大学付属中学校二年）

高校の部・菊池萌珠実「からだ」（クラーク記念国際高等学校三年）

優秀賞

中学校の部・長尾果乃子「自分の体、自分の思う体」

（旭川市立永山南中学校二年）・山崎未愛「歩く」（筑波大学付属中学校三年）

高校の部・白井波音「体感」（静岡県立韭山高등학교二年）・千田凜紗「いのちの奇跡」（遺愛女子高等学校一年）

井上靖ナカマドの会賞

中学校の部・櫻井壮二郎「足りなかったもの」（旭川市立光陽中学校三年）

高校の部・佐藤滋修「一長一短の身長」（北海道旭川永嶺高等学校二年）

○令和二年一月二十六日

伊豆市湯ヶ島の熊の山墓地と天城会館劇場ホールにおいて、伊豆市、伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会主催、長泉町「井上靖文学館」、本財団等の後援で「あすなる忌」（井上靖追悼事業）が行われ、以下の行事を行いました。

・熊の山墓地にて墓参会

・井上靖作品読書感想文・感想画コンクール最優秀賞  
作品の発表と表彰

・「あすなる忌」記念事業として、第一部に本財団理事

の勝呂奏氏による「オリンピックと井上靖」の講演、

第二部に勝呂氏による進行で井上靖の孫（井上恭一

氏、黒田裕之氏、黒田次郎氏）による「孫たちが見た

井上靖の素顔」のトーク

読書感想文・最優秀賞

小学校の部・水谷真緒「どうぞおさきにーを読んで」（伊豆市立修善寺南小学校六年）

中学校の部・小川真志「考える「存在」」（愛光中学校一年）

高校の部・白井波音「おろしや国酔夢譚」（静岡県立韭山高등학교二年）

読書感想文・優秀賞

小学校の部・和佐田真理子「月姫の苦しい決断へ思い  
出に」（市原市立清水谷小学校六年）

中学校の部・村岡杏美「「しろばんば」とは？」（筑波

大学付属中学校一年）・宮崎悠羽「きらきらしたもの」

（筑波大学付属中学校二年）

高校の部・榎原尚子「「わが母の記」を読んで」（静岡県立立花山高校二年）

高校の部・白井波音「体感」（静岡県立韭山高등학교二年）

・千田凜紗「いのちの奇跡」（遺愛女子高等学校一年）

井上靖ナカマドの会賞

中学校の部・櫻井壮二郎「足りなかったもの」（旭川市立光陽中学校三年）

高校の部・佐藤滋修「一長一短の身長」（北海道旭川永嶺高等学校二年）

○令和二年一月二十六日

伊豆市湯ヶ島の熊の山墓地と天城会館劇場ホールにおいて、伊豆市、伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会主催、長泉町「井上靖文学館」、本財団等の後援で「あすなる忌」（井上靖追悼事業）が行われ、以下の行事を行いました。

・熊の山墓地にて墓参会

・井上靖作品読書感想文・感想画コンクール最優秀賞  
作品の発表と表彰

・「あすなる忌」記念事業として、第一部に本財団理事

読書感想文・ふるさと賞

小学校の部・高橋の夏「天城のすばらしさ」（伊豆市

立天城小学校六年）

中学校の部・鈴木高徳「鮎太を通して感じた「影響」

（伊豆市立中伊豆中学校二年）

感想画・最優秀賞

小学校の部・井澤ひなた「上の家」（伊豆市立天城小学校四年）

中学校の部・小林夢加「別れの日」（愛光中学校一年）

感想画・優秀賞

小学校の部・長岡幸奈「湯ヶ島にそびえたつ弘道寺」

（伊豆市立修善寺小学校五年）

中学校の部・澤田佳奈「松林から見える海」（愛光中学校一年）

感想画・ふるさと賞

小学校の部・岡田七海「天城の鳥居」（伊豆市立修善寺

南小学校六年）

中学校の部・佐藤綺音「上の家」（伊豆市立中伊豆中学校二年）・鈴木理緒「帰り道」（伊豆市立修善寺中学校

一年)

○令和二年三月一日 劇団しろばんばの公演

劇団しろばんば主催、伊豆市教育委員会共催、静岡新聞社、静岡放送、井上靖ふるさと会、井上靖文学館、本財団の後援で、伊豆市の旧井上邸及び土蔵跡周辺において、天城湯ヶ島町民劇団しろばんばが、野外劇「しろばんば——洪作が過ごした久保田」を公演しました。本財団はこの公演に助成を行いました。

(六) 特定寄附事業

令和元年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

(七) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関する次のような催しがありました。

○富士正晴記念館（茨木市立中央図書館併設）

藤澤全（元日本大学教授）

令和元年九月七日、文学講演会（第二回）「読んできたい昭和北海道の文学」講師・平原一良（北海道文学館理事長）

令和元年九月二十八日、文学講座「井上靖小説『花壇』の位置づけ」講師・石本裕之（旭川工業高等専門学校教授）

○石川近代文学館

令和元年五月六日、井上靖顕彰「鑑真まつり」  
平成三十一年四月二十日～令和元年六月二十三日、  
「春の企画展 平成をうつす——未来をうけつぐ言葉と本と物語」、井上靖自筆原稿「本覺坊遺文」「孔子」  
展示

○中軽井沢図書館

令和元年五月六日、図書館文化講座「井上靖の人と文学」講師・傳馬義澄（國學院大学名誉教授、元井上靖研究会会長）、瀬戸口宣司（詩人、井上靖研究会常任理事）、

平成三十一年三月二十八日～令和元年七月三十一日、  
「茨木でつながる作家——「富士正晴」と「井上靖」」、  
富士氏に宛てた井上の書簡に加え、井上が富士氏のノートに記した自宅までの地図など、茨木にまつわる資料

○天城図書館（伊豆市）

平成三十一年四月一日、館内の「井上靖資料室」リニューアルオープンの式典

○筑波大学附属中学校

平成三十一年四月十六日、講演「むかしの湯ヶ島——父としての井上靖」講師・浦城幾世氏

○井上靖記念館（旭川市）

令和元年五月六日、「生誕日無料開館ミニコンサート」ナナカマドの会共催、演奏・トレンインフェ

令和元年七月六日、文学講演会（第一回）「人生の神曲・逆縁のエレジー——『星と祭』に花束を！」講師・

井上修一（本財団理事長）

○井上靖ナナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）

令和元年七月二十五日、『赤い実の洋燈』五十四号発行

令和二年二月二十八日、『赤い実の洋燈』五十五号発行

○鎌倉文学館

令和元年十月六日～十二月十五日、特別展「オリンピックと文学者」、井上靖のローマ大会での創作ノートと創作メモ（昭和三十五年）の展示、東京オリンピックで開会式を取材した「開幕」の記事（昭和三十九年）の展示

○滋賀県長浜市「浜湖月」

令和元年十月十九日、『星と祭』復刊プロジェクト実行委員会主催「井上靖『星と祭』復刊セレモニー」、挨拶・高木伸幸氏（井上靖研究会会長）、田主誠氏（版画

家、井上修一（本財団理事長）、記念講演「一佛一会  
観音様に導かれて」講師・駒澤琛道氏（写真家、随筆家、  
僧侶）、佐々木悦也氏（高月観音の里歴史民俗資料館学芸  
員）

○徳島県立文学書道館

令和元年十一月八日（令和二年二月九日、文学企画  
展「文学者の見たモラエス」、井上靖「モラエスの新し  
さ」（『日本ポルトガル協会会報』第二号、一九六八年）の  
紹介や写真の展示

（八）役員

令和元年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は  
次の方々でした。

理事長 井上修一  
専務理事 浦城幾世  
理事 岡崎正隆 狩野伸洋 黒藤真一 佐藤純子  
勝呂奏

理事 浦城義明 岡崎正隆 狩野伸洋 黒藤真一  
佐藤純子 勝呂奏  
監事 高田敏和  
評議員 井上敦夫 井上卓也 相賀昌宏 表憲章  
小西千尋 篠弘 三木啓史 山口建  
(五十音順)

令和元年度の事業を協力して実施していただいております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々でした。

委員長 黒藤真一（旭川市教育委員会教育長）  
副委員長 十河宣洋（NPO法人・旭川文学資料友の会会長）  
児玉真史（北海道新聞旭川支社長）  
委員 荒川美智（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川  
市井上靖記念館長）

監事 大鷹明  
評議員 井上卓也 相賀昌宏 表憲章 小西千尋  
篠弘 三木啓史 三好徹 山口建  
(五十音順)

また令和元年度、旭川市より監事をお引き受け下  
さいました大鷹明氏をご都合によりご退任になられま  
した。ご指導ご鞭撻をいただき、誠にありがとうございました。  
また財団設立当初より理事、後に評議員をお  
引き受けいただきました三好徹氏をご都合によりお引  
きになられました。本財団のために長年にわたりご指  
導、ご尽力いただきましたこと、心より御礼申し上げ  
ます。

なお令和二年度の評議員会で選任されました理事・  
監事・評議員は次の方々です。ご支援のほど、よろし  
くお願い申し上げます。

理事長 井上修一  
専務理事 浦城幾世

高田敏和（旭川市教育委員会社会教育部長）  
監事 東延江（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川  
文学資料館長）  
那須かおり（北海道新聞旭川支社事業担当）

（九）住所・連絡先

一般財団法人 井上靖記念文化財団  
〒一五六―〇〇五三  
東京都世田谷区桜三丁目五番九号  
電話・FAX：〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会 事務局  
〒〇七〇―〇〇三六  
旭川市六条通八丁目 セントラル旭川ビル七階  
旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内  
電話：〇一六六―二五―七五五八  
FAX：〇一六六―二五―八二一〇

## 編集後記

『伝書鳩』二十一号をお届けします。

コロナ禍においても滞りなく対応してくださった執筆の方々には、心より感謝申し上げます。

来年は祖父の歿後三十年。命日に合わせて催しが企画されていましたが、中止になってしまいました。しかしその歿後三十年の命日である令和三年一月二十九日に、野本寛一先生の『井上靖の原郷』が刊行される予定です。『伝書鳩』前号までの全七回の連載に、加筆なされたものです。

新年がどうか明るい年になりますように。

西村承子



## 伝書鳩 第21号

発行 二〇二〇年十二月二十八日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三二五一九 井上方

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団